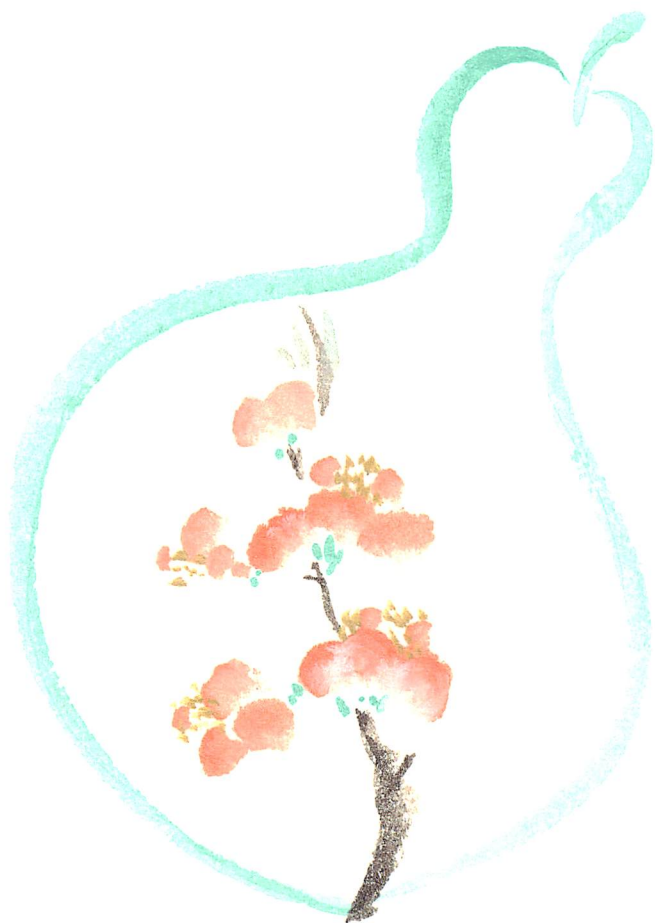


# みめじみの

## 第24部





# みめじみの

## 第24部



大谷光道著

### 目次

ほんとうの極楽	2
極楽にいるような	2
所変われば：の宝物	4
この世にはない 「八功德水」	9
この世のほうが楽しい？	12
何のために、何を求めて、 極楽に行くの？	15
本物のところ	20
絶壁をよじ登る	22
まとめ	24
読者の頁	26
あとがき	29
お知らせ	30

# ほんとうの極楽

## 極楽にいるような

この前お会いしたのは夏の真つ盛りでしたね。温泉の露天風呂で見たホテルの話、覚えてくださってますか。ホテルがきらきらと光って、まるでお浄土・極楽にいるような思いをしたというお話をしました。

お浄土については、大地のこと、生えている木のこと、風のこと、空のこと、池のこと、建物のこと、聞こえてくる音楽のこと、その住人のこと、その他あらゆることについてお経に説かれています。今日は温泉にちなんで、お浄土の池について見てみましょう。

「極楽には金銀財宝で出来た池（七宝の池）がある。その池は八つの素晴らしい性質を持った水（八功德水）を湛えている。池の底は金の砂ばかりで敷き詰められている。池の回りをぐるっと回れるような金銀財宝で出来た回廊があつて、それは池の畔ほど低くなるように階段状になっている。上の方を見ると楼閣があり、これも金銀財宝で出来ている。池の中には蓮の花が咲いていて、その大きさは車輪のように大きい。それは青い花は青い光を出し、黄色い花は黄色い光を出し、赤い花は赤い光を出し、白い花は白い光を出している。これらは優れて見事で、清々しい香りがする。」

どこかで聞いたような内容でしょ。皆さんおなじみで、先ほどもご一緒にお勤めした『阿弥陀経』の次のところを思い出されたと思います。

極楽国土、有七宝池、八功德水、充滿其中、池底純以、金沙布地、  
四辺階道、金・銀・瑠璃・玻璃合成、上有楼閣、亦以金・銀・瑠璃・  
玻璃・砮磈・赤珠・碼碯、而嚴飾之、池中蓮華、大如車輪、青色青

光、こう、黄色おうしき、黄光おうこう、赤色しやくしき、赤光しやくこう、白色びやくしき、白光びやくこう、微妙みみょう、香潔かうけつ。

今私は、「金銀財宝」と言いましたが、金、銀、瑠璃、玻璃、碑磔、赤珠、碼瑙の七つの宝のことで、お経に「七宝」とあったり、またところによってはこの七つを一々挙げたりしてあります。この七つは古代インドの寶石ですが、銀の次の三つはあまり聞きなれないし、そのせいがお経を唱えていても舌をかみそうになるところがあります。漢字はたいへん難しいんですが、説明を聞いていただくとそうでもないことがわかるので、ちょっと聞いてください。

### 所變われば……の宝物

まず瑠璃というのは、瑠璃色（紫がかった深い青色）の瑠璃ですが、辞書には「緑柱石」とあり、ガラスの古い呼び名でもあるそうです。また、私たちのところの阿弥陀様じゃなくて、薬師如来のお浄土は「浄瑠璃世界」と言

って、大地が瑠璃で出来ている世界だそうですね。ちなみに「浄瑠璃」や「人形浄瑠璃（文楽）」も、ここから派生しています。

次の玻璃という宝石は水晶のことです。私たちは水晶と言っても目の色を変えようなことはありませんが、おそらく昔は容易には手に入らなかったものなのでしょう。

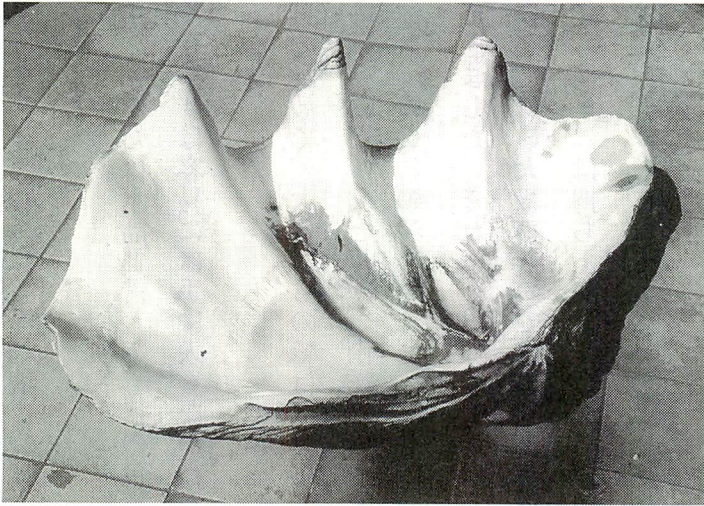
それから、碑礫はシャコガイという貝の貝殻で、大きいものでは二メートルほどにもなるそうです。私の生まれる前のこと、父と母が、南洋といいますから日本の南の方ですが、どの辺でしょうか、そちらへ行ったとき、このシャコガイをお土産にいただいて帰ってきました。それは、貝殻の長いほうで一メートルくらいですから、この貝にしては最大級のものではありません。でも厚みは七センチほどもあり、二人でも簡単には持ち上がりません。何か、辞書によると食用に出来るんだそうですね。しかしあれを見ると、逆にこちらのほうが食用にされてしまいそうな（笑）、すごく大きくてぞつとす



るような貝です。これを玉にでも磨いて宝飾品にしたのでしよう。

その次に出てくる赤珠というのは赤い真珠のことで、瑪瑙というのはよくご存じの、今でもある瑪瑙ですね。

当たり前と言えばそれまでですが、物の価値観というのは「所変われば品変わる」もので、場所と時代によつて全く変わるものです。身近なところでは、私の小さい頃は金や銀、わけても金と言えたいへん価値の高いものでしたが、このごろはお酒



南洋のお土産・シャコガイ



に金箔が入っているような時代です。昔だったら、もしお酒に金箔が浮いていたら、驚いて飲み込む気にはならずそれを集めて大切にしまっておいたでしょうね。また金箔と言えば金閣寺（京都）の金箔の張り替えについて耳にしたことがあります。昔と反対で金箔はごく一部でかかる費用の大部分が人件費なんだそうです。

古代インドの宝物は今の私たちの価値観からすると少し隔たりがあるようにも思えますが、場所と時代の大きな差を考えると、私たちの価値観で計っては間違いを犯すことになるでしょう。

でも、大きな蓮の花が光を出す光景は圧巻で、現場（極楽）で見てみたい気がします。また「圧巻」ということとは離れますが、「赤色赤光、白色白光」は、「十人十色だからいいじゃないか。」と言う代わりに「赤色赤光、白色白光だから。」などと、わりと日常的に使うので、親しみのあることばです。



七宝の池

## この世にはない「八功德水」

このような極楽のお莊嚴しょうごん（美しい姿や飾り）の話は『大経』（『仏説無量寿経』）や『觀経』（『觀無量寿経』）にも説かれています。『大経』ではこの七宝の池に入浴する話が説かれていて……。あ、その前に八功德水ってどんな水なのかということをお話するのを忘れていました。これは、甘くて、冷たくて、柔らかくて、軽くて、澄みきっていて、臭みがなくて、飲むときにのどを損なわない、それから飲み終わって腹を痛めない、の八つの特質を持った水のことです。日本は水が豊富できれいなのですが、インドではあるいは日本ほどいい水はあまりないのかも知れませんが、しかし、甘くて、柔らかくて、軽くて、などというのは、やはり特別な水としか言えません。そういう八功德水のいっぱい入った池が極楽にはあるということです。

さて、『大経』にある入浴の部分です。

かの諸菩薩および声聞衆、もし宝池に入りて、意に水をして足を没さしめんと欲へば、水すなはち足を没す。膝に至らしめんと欲へば、すなはち膝に至る。腰に至らしめんと欲へば、水すなはち腰に至る。頸に至らしめんと欲へば、水すなはち頸に至る。身に灌がしめんと欲へば、自然に身に灌ぐ。還復せしめんと欲へば、水すなはち還復す。

冷煖を調和するに、自然に意に随ふ。「水浴せば」神を開き、体を悦ばしめて、心垢を蕩除す。「水は」清明澄潔にして、淨きこと形なきがごとし。「池底の」宝沙、映徹して、深きをも照らさざることなし。微瀾回流してうたたあひ灌注す。安詳としてやうやく逝きて、遅からず、疾からず。〔『仏説無量壽經』〕

その池の中に入ってちよつと水が欲しいなと思うと足下まで水が上がってくる。膝のあたりまで欲しいなと思うと膝まで水が上がってくる。腰まで欲しいなと思うと腰まで上がってくる。首まで欲しいなと思うと首まで上がって

くる。体に灌いで欲しいと思うと自然に灌がれる。そして、「もういいわ」と思うとすうっと水が元のように引く。

またその温度も、思った通りの温度にあったかくなったり冷たくなったり変わってくれる。この池に入れば、心が清々しく、体も生き生きとして、心の垢ものぞき取られ、水はすみわたって清いことといえば形がないほど透きとおっている。池の底の宝沙には光が映えて、どんなに深くても照らさないということはない。波は静かで、遅すぎることもなく速すぎることもない。

(前記意識)

このようなことが書いてあります。

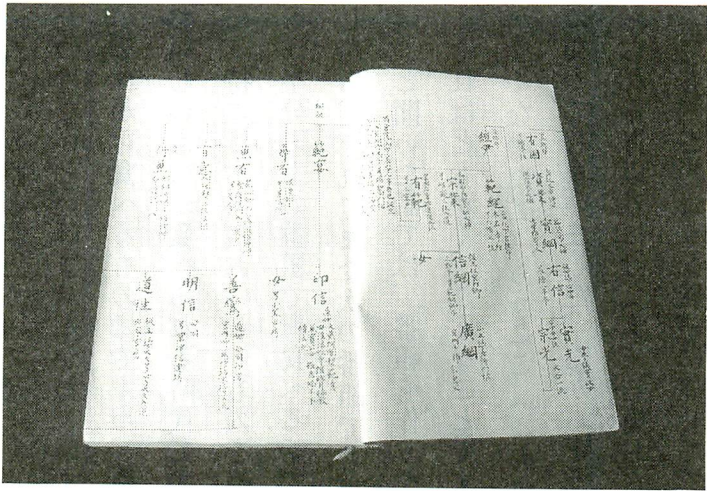
当然のことではあります、極樂というとお経の隅々に至るまで、この世ではない、特別のすばらしい世界である様子が説かれています。

## この世のほうが楽しい？

しかし、このごろは世の中がたいへん便利になって、私たちはまるで極楽にいるような生活をしております。今お話しているお風呂にしても、昨日、泊めていただいたお寺なんか、まるでこの八功德水の池のようなお風呂でした。お湯がちよっと冷めてくるとすーっと熱いのが出てきて、「わー、この勢いで出続けたら、どうしようかな。」と思ったところにぱっと止まって、やけどはしないようになっていっているのです。

二階へ上るのも三階へ上るのも、今の時代はエレベーターに加えてエスカレーターがあります。私の小学生の頃でしたが、近くのデパートで戦争でなくなっていたエスカレーターが復活するということで大騒ぎだったのを思い出します。さらに最近では自動式になっているエスカレーターがあつて、人が近づくと勝手に動き出すようになっていゝる。極楽にはエスカレーターがあ





大谷家系譜。中ほどに「範宴」とあるのは親鸞聖人のこと。

るのかどうか、お経には書いてないのでわかりません（笑）。私たち何の気なしに生活していますが、こんなことを考えていると、実はたいへん便利な生活をしているということに気づきます。

それから、珍しい物があるところや快適なところへ行きたい、素晴らしい景色が見たいと思えば、飛行機に乗ったらいつでも世界中どこへでもすぐに行ける。飛行機がすごく安くなったこともあります。この頃は、飛行機に長いこと乗っている



となんとか症候群とかって恐ろしい病気になることがあるので、それには気をつけなさいといけませんかね。いずれにしても好きのところへ行ける。

それから食べるものはですね、飽食時代って言われているように、何でもおいしいものが食べられる時代です。世界中には貧しい国もいっぱいあるのに、特に日本人はおいしいものを追っかけています。テレビの画面なんか、もう半分以上の番組で皆食べる話です。あそこで「おいしい」っていい顔をしたら、それでまた次の番組でも出演のお声がかかるんでしょう（笑）。ちよっと聞いた話では、番組も作りやすいんだそうです……。

それはともかく、こんなことですから、もうこの頃は「極楽へ行く楽しみがなくなった。」「もうここ（この世）にいたほうがいい。」ぐらいの世の中になってしまいました。だからそういうふうを考えておられる方も、ここにおられる方以外には（笑）結構おられるかも知れません。

でも、このような欲望に任せてですね、快樂のみで生活をしているという

ことになる、これはもうただ煩惱に任せて好きなことをしてということ、字に書くとこれは「動物」ということですね。これドウブツと読まないで、「動いている物」と読んでください。ドウブツというと犬や猫がかわいそうです。彼らのほうが真剣に生きてますからね。ですからただ煩惱に任せて、好きなことをして、食べたいものを食べて、ただこの世で動いてるだけ起きて寝て、それから楽しいことをしているだけで一生を終わってしまいうです。

### 何のために、何を求めて、極樂に行くの？

そこまでひどくはなくて、お浄土の大切さは考えているつもりでも、ともすると私たちはお浄土へ行く目的について、この世でのいわゆる快樂を求めようとするのと同じ薄っぺらな尺度で考えてしまっているかも知れません。程度の差こそあれ、このような傾向はだれしも無しとしません。

このようにいわゆる快樂・享樂のために極樂往生を願うのを「為樂往生」いらくおうじょうと言います。ずっと前に、

♪おらは死んじまっただー。……天国いいとこ一度はおいで、酒はうまいし姉ちゃんはきれいだ……

という歌が流行ったことがありました。このような願望は誰しも心の奥底に持っているものでしょう（笑）。

『阿弥陀経』の今見てきた「七宝の池」の少し前の部分に、

極樂の衆生は諸々の苦しみを受けることがなくて、ただ樂のみを受け  
るのである。

とあります。「極樂」はその字のごとく、確かに「極めて楽しいところ」です。しかし、同時に「諸々の苦しみを受けることがなく」の部分を読み落としているのが「為樂往生」なのです。「諸々の苦しみ」とは、取りも直さず私たちの苦の根源、一言で言えば「煩惱」です。極樂は覚りの世界ですから、

当然ながら煩惱の解消した世界です。貪りや怒り、愚痴によって我が身を苦しめているのであれば、どんなに楽しいことがあってもそれは一時のことで、決して「楽しいところ」とは言えません。

親鸞聖人の次のお言葉が味わわれます。

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。（『一念多念文意』）

このように煩惱に汚染されている自分の実態に気づかず、あるいは見ようとせず、苦を理解しないまま「楽しみ」だけを求めるといふ、樂の中身を履き違えた「為樂往生」には陥らないようにしたいものです。

その上で、極樂の見た目にとらわれたままに、本当にそれはどういう意味があるのかを考えなくてはいけません。極樂というところは我々の体

を、身体を楽しませるところではなくて、心を楽しませるといふか、心の本当の救いを、心を本当に「楽」にする、そのような究極の落ち着き……をいただく（得る）場所である、そういうところを見ていくべきでしょう。まあ、「体の楽しみ」と「心の楽しみ」に分けるのは荒っぽい区分ですが、誤解を恐れずに仮にこのような分け方で話を進めることにします。

親鸞聖人は、身体を楽しませる点において、私たちがわかりやすくすぐ行きたくなるような世界——お話を聞かされ景色を見せていただくことで、その楽しさを想い、そこへ行きたい気持ちが起こるようなところ——を「方便の浄土」であると仰いました。そして本当の極楽というのは、真に心の安住の得られる、もつとその元にある「真仏土」というところであると。

方便というのは「嘘も方便」と言うときの「方便」で、「手だて」という意味です。それによって真実の世界に導くための手だてということなのです。ですから、阿弥陀様のご真意は私たちを真仏土へ導くことであって、方便の

浄土はその手だて、きっかけで、いわば入門編というわけです。

私たちの願いに応じて現れてくださる仏様を「応身おうじん」とか「化身」と言い、その化身のおられる国（浄土）を化土けどと言います。ですから、方便の浄土はまた「化身化土」とか、略して「化身土」とも言います。私たちが「こういうところがいいな」と思うように現れてくるのが化身土で、私たちに仏の国をわかりやすく、親しみやすく、近づきやすく示してくださっているのです。そして私たちを引っ張ってさらにもう一步踏み込ませるようにしてくださるのですから、これがまさに方便のはたらきです。

このはたらきに引かれながら、私たちはお浄土が楽しいということの、その向こうに本当に心が楽しくなるとはどういうことなのかということをやはり考えて、求めていかなければなりません。そしてご信心が深まっていくにつれて、だんだん本物のところへ近づいて行けて、そして目の前のきらきらしたお浄土じゃなくて、その向こうの本当の安らぎの世界とだんだん親しく、





得 度 式

そこへあこがれられるようになっていくことが大切なのです。

## 本物のところ

本物の世界のことを先ほど真仏土と言いました。この世界は真の仏様（真仏）がおられる真の国（真実の浄土）で真仏真土、略して真仏土と言います。真の仏様は「報身<sup>ほうじん</sup>」とも言います。報身の報はその字のごとく「報われた」という意味で、「仏様ご自身の願い（本願）が報われて（成就・実現して）成仏された仏様」という意味です。同様



に真土は仏様の願いが報われて出来たものなので、報土ともいいます。

これによってわかるように、私たち衆生の願いに応じて現れる仏様（応身化身）と違って、報身仏（真仏）はご自身の願い、私たちの場合は阿弥陀様ですから、「衆生を念仏一つで救って、私の浄土に迎えよう」という願いを実現させられた仏様なのです。私たちをお浄土に往生させるのは全くこの仏様の力（本願力、他力）のみによるので、私たちには何もすることがなく、そのために簡単すぎてわからないので、わざわざこの前段階として設けられたのが、さっきから言っている化身化土なのです。

私たちが、すばらしいお浄土のお話を聞き、それを見せていただくとき、そこがとてつもなくすばらしすぎるので、「簡単に行けるんだよ。」と言われるまでも信じられず、それよりむしろ「そのためには〇〇の修行をせよ。」と言われたほうが道理にかなっているような気がして、修行に励もうとするのが人情じゃないでしょうか。

親鸞聖人のお書きになった『教行信証』は、文字通り、教、行、信、証の四巻はもちろん、その最後の『証の巻』の後にさらに『真仏土の巻』と『化身土の巻』を加えて六巻構成になっています。これは「証」すなわち覚り——私たちがやがてお浄土で開かせていただく覚り——の中身をさらに詳しくお示しになるために加えられた二巻です。「本当の仏様の世界はこうなんだよ。それから仮の仏様の世界はこうなんだよ。」と、懇切丁寧にお説きくださっているのです。

### 絶壁をよじ登る

ここで、こんなことを考えてみましょう。

海の孤島の絶壁の上のほうに楽園が見えます。Aさんは何とかそこへ行こうと、荒波を泳ぎ渡り命がけで崖をよじ登り楽園に到達します。

またBさんは、この楽園に行きたいとは思うもののもう一つ気が進まない

でいると、そのさらに上の方にまばゆい光が見えます。思わず手を合わせました。気がついてみたら自分はその光の真っ只中にいます。眩しくてよく見えないのですが、その光は阿弥陀様から出ているようでした。

次に、Aさんはこう思いました。「この楽園を誰が作ったか知らないが、そんなことよりここへは私の力だけで登り着いたので、私の努力なしでは来ることではできなかったのだ。私の力で手に入れた楽しみだから私のものだ。ここで受ける楽しみを誰にも邪魔される理由はなく、ずっとここで楽しんでいよう。楽園だけど仏様は見えないので極楽ではないのかも知れない。まあ、楽しければこれでいいや。」と。

またBさんは、「なんと素晴らしいところへつれてきてもらったのだろう。ここは阿弥陀様を作った極楽に違いない。私はあの不思議な光に合掌したところしか覚えていない。私をここにつれてきてくださったのも阿弥陀様に違いない。どうやら見えていた楽園より上の方に私はいるようだ。阿弥陀様の国

にいるだけでこんなに落ち着くとは知らなかった。遠くから見えていたあの楽園で受ける楽しみなど、楽しみのうちに入らない。Aさんもこっちに來たらしいのに。でも今すぐと言っても、今の私では力不足だ。もう少しここで阿弥陀様の教えを聞いてから、Aさんを誘いに行こう。」と。

## まとめ

これは、今までのお話を一つの比喻としてまとめてみたもので、言うまでもなく、Bさんが阿弥陀様の報土に、そしてAさんが化土に生まれた場合のイメージです。

報土は、阿弥陀様の本意、本音が実現されているところです。それはただの国ではなく、本願力——阿弥陀様が私たちを成仏させる不思議な力——によって覚った（成仏した）人ばかりの世界です。この人々は、阿弥陀様から見て「成仏した形はこれしかない」という、いわば阿弥陀様仕様、阿弥陀

様規格にかなった人たちがばかりです。

一方化土は方便の浄土であるとはいえ、これもやはり阿弥陀様の御本願の中に「方便としての浄土をも併せて作る」という内容が誓われて作られたものです。ただ、この浄土は方便という機能を果たさねばならないので、まだ信心とは縁遠い段階での私たちの好む世界が実現しているところでは

阿弥陀様の御本願には化身土と真仏土の両方が整っていて、自力によって化身土に往生する段階から、やがて真仏土に生まれられるような他力の信心に私たちを導き入れてくださるのです。



感想  
意見

神奈川県相模原市 矢野 清香さん

「みめぐみの」を毎号有難く拝読させていただいております。聞法会館などで法話を聴かせていただき、わかったようなつもりでいながら、困った時の何とやらでついお仏壇に向かって念仏を称え、おねだりをする自分があります。二十二部を拝読してあらためて自分の愚かさに気づき恥ずかしい限りです。

これからは「先祖供養をしよう」とすることによって力の及ばない自分自身を見

いだすこと」に専念するよう心掛け、日々努力してまいりたく存じます。

神奈川県相模原市 宮田 澄江さん

「みめぐみの」を毎回楽しみに拝見させていただいております。私も何年前からお寺で「正信偈」の法話の勉強させていただいております。初めの頃は内容が難しくチンプンカンプンでした。法話が一段と難しくなる頃になりますと昨今の時事問題や世界情勢のことを判りやすく話され、法話をよく理解出来る様ご指導いただいております。一ヶ月一度の楽しみであり、私の反省のひと時であります。

富山県南砺市 河合 寛さん

二益というのを、わかり易くお説き下さいまして、今までの疑問がはつきりしました。『念仏の信者は月で、阿弥陀様が太陽です。ここのところをよくわき



まえておく必要があります。』真宗聖典を開いて今、あらためてご和讃『如来すなわち涅槃なり、涅槃を仏性となづけたり。凡地にしてはさとられず、安養にいたりて証すべし』を確認、拝称したことです。御文は毎朝順ぐりに拝読していただきますが――四をよく読みいただくことですね。

南無阿弥陀仏 合掌

## あとがき

みめぐみの刊行委員会

昨年末に今までのお内事（下京区）での最後の報恩講を終えられ、いよいよ新天地への出発準備に余念のない光道台下ですが、非常にお忙しい中にも『みめぐみの』の出版予定を変更することなく第二十四部の執筆をして下さいました。

以前、光道台下は「最近テレビなどでよく『天国で安らかにお休み下さい』など天国という言葉を目にするが、『天国』は他の神様のおいでのなる所で私たちが仏教徒が行く所ではないのに、どうして一般化したのか……」と仰ったことがあります。今回は私ども真宗信者の行く「極楽浄土」のことを詳しく分かりやすくお示し頂きました。

真宗―浄土三部経―親鸞聖人の教えを聴聞する者として、「極楽浄土」についての認識を深め、光道台下のご教示をしっかりと心に刻み、行き場所を間違わないように心したいものです。

## お知らせ

前号付録の「嵯峨野新天地へ」にてご覧いただきましたごとく、来る三月三十一日にはいよいよ新天地へ向けての出発式が行われます。これはご本尊・ご眞影・長持ちなどの列が新天地へ出発するもので、教如上人以来四百年の節目となります。

つきましては当分の間、当刊行委員会の連絡先も聖護院の光道台下のお屋敷に移させていただきます。

みめぐみの刊行委員会 仮事務所

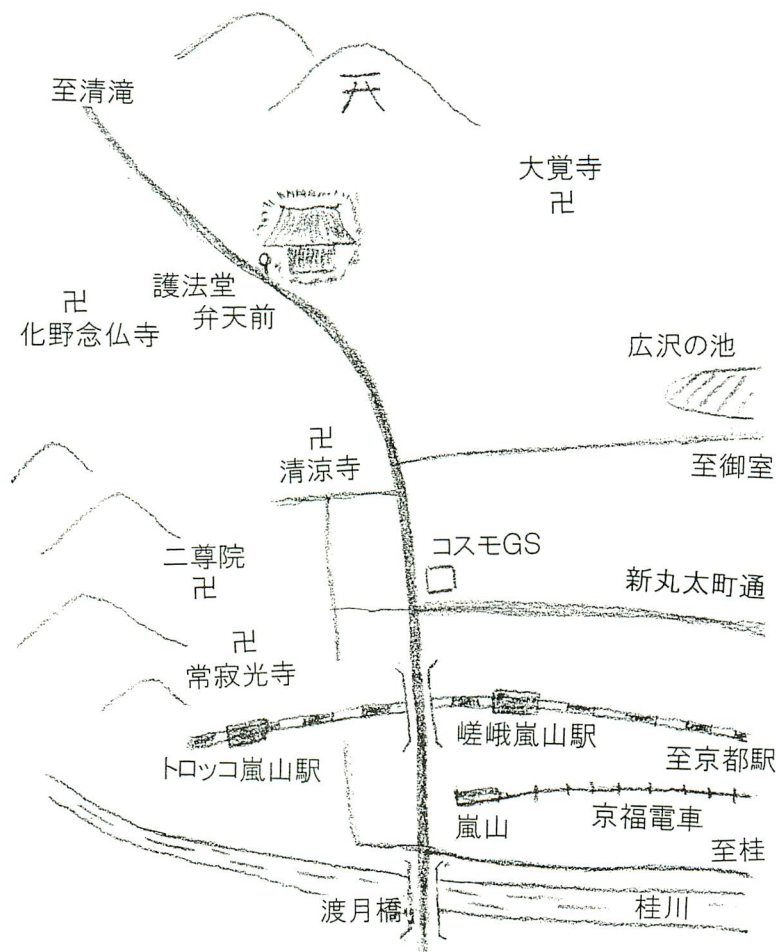
京都市左京区聖護院円頓美町十番地 大谷光道気付

電話〇七五―八八二―六二六二

嵯峨野新住所

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町二十一番地

# 新天地近辺



- |      |  |
|------|--|
| JR   | 嵯峨野線「嵯峨嵐山駅」よりタクシーで3分、歩いて15分。                             |
| 車    | 名神高速道路＝京都南・大山崎各インターより30～40分、<br>京都東インターより40～50分。         |
| 京都バス | 清滝行き＝<br>72番 JR京都駅→四条烏丸、<br>62番 四条河原町→三条京阪、「護法堂弁天前」下車スグ。 |

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。  
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

## みめぐみの 第24部

---

2005年3月5日 印刷

2005年3月10日 発行

定価 200円

著者 大谷光道

発行 みめぐみの刊行委員会

〒606- 京都市左京区聖護院円頓美町10  
8323 大谷光道気付

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印刷 (株)中外日報社

---





みめぐみの刊行委員会刊